検索

研究ノート

「与那国島の祭事の芸能」の現在
Present of
“*Festival Performing Arts of Yonaguni Island*”

田　場　裕　規
TABA　Yuuki

（梗概）

1985 年 1 月 21 日、「与那国島の祭事の芸能」は、国の重要無形民俗文化財に指定された。指定から 33 年経過している。指定後、与那国町の人口減は著しく、「与那国島の祭事の芸能」の保存・継承は危機的な状況にある。1985 年（2054 人）だった人口は、2015 年には（1500 人）を下回った。2016 年 3 月 28 日、防衛省が西部方面情報隊等を配備したことを主な要因として、1706 人（2017 年 12 月 31 日現在）に回復したが、いくつかの課題に直面している。

与那国島の芸能は、祭事と密接に関わって継承されてきた。祭事に供する芸能として、位置づいていた。しかし、戦後、慶田元貞則（1888 ～ 1953）によって琉球古典音楽野村流音楽普及所が開設されることによって画期を迎える。慶田元貞則は、県立水産学校を卒業後、島の学校の教員となり、村長も務めた人物で、つねに「先生」と呼ばれて周囲の尊敬を集めていたという。「芸道２０か条」を掲げ、門下生を指導する様子からは、芸道による精神修養を目指していたことがわかる。

「芸道２０か条」

最も高尚なる芸術は道徳と一致す。勤勉と着実は高尚なる芸術家たらしむ。熱　心は妙技に達する門なり。死するまで学ぶべし。日常の生活を音楽的ならしむべし。決して己が技を誇るなかれ。自惚心を制するには音楽史を読むべし。常に己より優れている人を友とすべし。未開の曲に妄評を下すべからず。音一聞せしのみにて、直ちに其の曲の是非を判断すべからず。曲の判断をなすには、其の曲が高尚なる音楽思想よりなれるか、又は一時の座興になれるかと注意すべし。決して賤劣なる音楽を弾奏し又は傾聴すべからず。決して流行を追うべからず。俗耳の判断に留意せずして専門家の批判を聞くべし。常に教師の前にあるが如くに弾奏すべし。曲を了解することに力むべし。名曲に向かって私飾をなすは最大の侮蔑なり。耳を発達せしむるに注意すべ

し即ち耳に入る凡ての音響（例えば鳥の声、車の響き）等に音楽的に注意すべし。楽器の助けなくとも完全に唄い得るように練習すべし。名人の弾奏は恰も酔漢の歩むが如く殆ど一定の拍子なきが如し、然れども初学者は決して之に倣うべからず必ず正確なる拍子をとりて奏すべし。（宮良保全『与那国島の民謡とくらし』153 頁）

慶田元の教えは、戦後の混乱期に安らぎをもたらし、志の高い若者を育てていった。それは、青年教育そのものであり、地域おこしの基盤も作っていった。慶田元の没後（1954）年、野村流音楽研究会与那国支部が結成された。慶田元の門下生たちはその遺志を継いで、研究会の活動方針を議論した。その際、研究会内では、「組踊公演を強く主張する」意見と、「まず島唄の工工四作成をすすめるべきだと主張する」意見の対立が生まれたという。この対立の意味を検討することに、現在の「与那国島の祭事の芸能」の考える視点がある。本稿では、調査によって見出した課題を検討し、保存・継承に関わる要件を考察していく。

1　はじめに

与那国島の戦後芸能史を概観したい。与那国の芸能史に特化した資料がないため、宮良保全『与那国の民謡とくらし』の中の本人年譜及び「第二章戦後民謡発掘と伝承活動」から芸能に関係する記述を抜き出し、さらに聞き取り調査から関係事項を追加して以下にまとめる。

1888 年　慶田元貞則生まれる。
1945 年　太平洋戦争終結。※戦後いち早く慶田元は琉球古典野村流音楽普及所を開設。
1947 年　慶田元貞則普及所に宮良保全入門。
1953 年　慶田元貞則死去。
1954 年　琉球古典野村流音楽与那国支部結成。
※活動方針を決める際、「組踊公演を強く主張する」意見と、「まず島唄の工工四作成をすすめるべきだと主張する」意見が対立した。前者は、野村流古典音楽の習得を基軸に、組踊を中心とした与那国の伝統芸能に取り組むことを主張した。後者は、八重山の安室流工工四に掲載されている与那国の歌が、ナガナン節、亀久畑節、ションカネー節、マ

ヤ小節の四曲であったため、他の与那国の歌を伝承する観点からの主張だった。

1955 年　第 1 回芸能発表会（平和館）。組踊「北山敵討」、歌劇「泊阿嘉」、舞踊等。

1956 年　第 2 回芸能発表会（平和館）。組踊「銘苅子」、歌劇「？」、舞踊等。

1957 年　テープレコーダー購入。与那国島の民謡を発掘し工工四に向けた取り組みとして録音作業を始める。

1959 年　第 3 回芸能発表会（平和館）。組踊を主体にした発表。

1961 年　第 4 回芸能発表会（平和館）。組踊を主体にした発表。

1966 年　郷土民謡研究会結成。与那国島の歌謡を収集し、工工四を作成・編集。後に与那国民俗芸能伝承保存会の活動の一部に吸収される。

※ 1955（昭和 30）年代～ 1965（昭和 40）年代、各ムラ（祖納東、祖納西、島仲、比川）同士が、島の祭事や行事に提供し競い合う、スブグトゥ（勝負事）の対抗心が激しくなり、それが原因して、野村流与那国支部の会員内で悶着が起きた。

1969 年　野村流音楽与那国支部を改称して、与那国民俗芸能伝承保存会を結成（4 月）。

琉球政府から依頼があり、与那国島のことを各放送局に紹介するという目的で、島唄を 6 曲録音（6 月）。

史跡民芸の旅一行 50 名に芸能披露。沖縄文化協会、沖縄民芸協会、沖縄写真連盟、琉球放送の関係者に、チディン口説、ナガナン節、亀久畑節、マヤ小節、スンカニを披露（10 月）。

1970 年　『歌詞解釈付与那国民謡工工四全巻』福里武市・冨里康子・宮良保全（共著）発刊。与那国民謡工工四発刊祝賀会並びに芸能発表会。かぎやで風、チディン口説、トゥグル嶽ディラバ、ナガナン節、ユナハハラ節、ンダタラ節、旅果報節、カリユシ節、弥勒節、イトゥヌブディ節、ミティ唄、来夏節、ウブダミティ節、マヤ小節、スユリディ節、ナガク節、スンカニ、ディラブディ節、トゥバルマ、亀久畑節披露。旅果報節、カリユシ節、与那覇原節、ンダタラ節、ミティ唄、ウブダミティ節、ディラブディ節は、新しく振り付けた。新崎長明を主に冨里康子が補佐して振り付けた。

※この後、三度改訂されている。

1971 年　八重山地区古謡及び古典舞踊大会に参加。

1973 年　第 1 回与那国民俗芸能発表会（琉球新報ホール）。聞き取り調査から、発表会の後、豊見城にあった NHK 沖縄放送局のスタジオ収録もあったことが分かった（2 月）。

1974 年　第 2 回与那国民俗芸能発表会（琉球新報ホール）（1 月）。

1975 年　竹富ユンタ連の会と唄の交流会（6 月）。
国際海洋博覧会サブスペシャルデーに計 2 回 75 ～ 80 名出演（10 月）。
西地区シティ踊り伝承の夕べ（10 月）。組踊「北山敵討」、舞踊、狂言等。

1976 年　八重山ヒルギの会に出演。
島仲地区シティ踊り伝承の夕べ（10 月）。「勝連の組」、弥勒節、棒踊、狂言等。
民音「島唄祭」出演（10 月）。

1977 年　冨里康子三線教室開設。

1978 年　『与那国島の無形文化財』（与那国町教育委員会）発行。ウガンフトティ（豊年祭）、スル踊り、シテ踊り、ダトダギ、木遣等の記録（10 月）。

1980 年　名古屋まつり同好会会長田中義弘の依頼で名古屋公演（4 月）。文化庁本田安次の協力により日本青年館公演（6 月）。第 24 回名古屋公演（6 月）
与那国民俗芸能を豊見城公演で NHK 沖縄放送局が録画（7 月）。

1982 年　『改訂版声楽譜付与那国民謡工工四全巻』福里武市・冨里康子・宮良保全（共著）発刊（4 月）。
※声楽譜付工工四は、与那国出身の民謡歌手に起譜を依頼したということが聞き取り調査で分かった。起譜者は、発刊を急ぐことに慎重で、すぐに出版することをしないようにと言ったが、支部結成以来、目標としていたことだったために発刊。しかし、地域や人によって歌い方が異なることや誤植や採譜ミスなどが見つかり、問題になった。
国立劇場公演リハーサル（中央公民館）（5 月）、国立劇場公演リハーサル那覇公演（琉球新報ホール）（6 月）。
与那国民俗芸能発表会（国立劇場）6 月 11 日（1 回）、12 日（2 回）、14 日（1 回）計 4 回公演。

1983 年　東アジア芸術祭（台湾）公演（4 月）。

1984 年　「日本の伝統の美コレクション」パリ公演（1 月）。
35 年ぶりにシティ願祭開催（11 月）。
第 1 回与那国民謡コンクール
1985 年　国指定重要無形民俗文化財「与那国島の祭事の芸能」（1 月）。
1986 年　「日韓両国指定重要文化財合同公演」に参加（5 月）。
与那国町離島振興総合センターの舞台において、映像記録の撮影。島仲地区芸能保存会、東地区芸能保存会。（『与那国島の祭事の芸能』（与那国町教育委員会）に詳しい）（12 月）。
1987 年　与那国町離島振興総合センターの舞台において、映像記録の撮影。西地区芸能保存会、比川地区芸能保存会（『与那国島の祭事の芸能』（与那国町教育委員会）に詳しい）（11 月）。
1988 年　与那国祭で「ドゥリティ（行列）」復活。
1997 年　ニューヨーク、カネーギーホール公演（9 月）。

慶田元貞則の示した「芸道 20 か条」は、弟子たちに音楽への正統な向き合い方を示し、そこを基点にしながら、自己実現・自己成長を促した。この志は、慶田元亡きあと、弟子たちを島唄の発掘や、工工四作成などの作業に駆り立てていった。そして、琉球古典野村流音楽与那国支部の結成に繋いでいった。

研究会内では、「組踊公演を強く主張する」意見と、「まず島唄の工工四作成をすすめるべきだと主張する」意見の対立が生まれたという。どちらも正統を重んじる立場からの発言だったことは想像に難くない。結果的には、組踊公演を主張する側が優勢であったことが、第 1 回発表会の内容からわかる。これは、三線を通して与那国の芸能を自覚していったことを意味する。組踊を志向するのは、芸能の鍛錬に必須である古典の技法を身につけ、その技法の習得過程において、「我が島」の芸能を相対化し、自覚化していったことを見出すことができる。

果たして、1966 年に郷土民謡研究会が結成され、与那国島の歌謡を収集し、工工四を作成・編集することが進められた。そして、1970 年には、『歌詞解釈付与那国民謡工工四全巻』が発刊される。島唄の工工四は、与那国の芸能を相対化し、その価値を自覚することになったが、同時に正典化していき、演奏法、歌唱法の統一を図っていった。そのことによって、工工四への苦情も寄せられたと聞く。工工四の発刊は、後にコンクールなどが開催されることの遠因にもなる。

芸能において、「正統」を規定することは、同時に「異端」を作り出すことにもなる。工工四の発刊は、工工四から外れるモノを作り出すことになってしまった。

1955（昭和 30）年代～ 1965（昭和 40）年代の芸能の状況は、非常に活気があり、地区ごとに競い合って、芸能がどんどん成熟していく時代だった。その結果、島外や県外に出張する公演も多くなっていくが、その継承のあり方は、地区ごとに保存会を持ちながらも、与那国民俗芸能伝承保存会を中心に、専門的な実演集団を形成するようになっていった。地区の別なく、選び抜かれた実演家で組織した与那国の芸能団は、「与那国島の祭事の芸能」とは異なる性格の芸能を目指していくことになる。つまり、シティブディや豊年祭、結願祭などの島の信仰と強固につながり、神に奉納する性格とは異なる芸能に進化していった。与那国の芸能が、このような展開をみることになったのは、偏に、工工四の発刊によって、我が島の芸能を相対化し、自覚化していったからであり、芸能の水準を大きく押し上げ、多様な芸態を作り上げていくことになったと考える。

その中心は与那国民俗芸能伝承保存会であり、中心的な役割を担っていたのは福里武市・冨里康子・宮良保全であった。三人の苗字の頭文字をとって、福宮冨流（ふみとみりゅう）という流派を名乗っていた時期もあった。が、現在確認できる与那国の芸能の多様性は、この三人によってもたらされたと考えても過言ではない。しかし、「正統」を極め、上演する目的が、〈神〉から〈人〉に移動したことは否めない。さらに、過疎化によって人口が減っていくと、芸能の正統性は、個人の責任を追及するものとなり、実演するものたちの目的があいまいになっていった。

2 「与那国島の祭事の芸能」の現在①（2017年11月24日聞き取り）

与那国町教育委員会の担当者からの聞き取りによると、与那国の祭事は踊り座、棒座等、座の形態をもって継承されてきたという。ただし、今から 23 年前から、祭事を掌るツカサは、島に一人しかいない。そのため信仰と祭事、あるいは信仰と芸能の結びつきが弱くなっており、祭事、芸能とも形骸化や簡略化が進んでいる。シティブディはどの公民館でも現在は行っていないので、継承は危機的な状態である。とくに豊年祭などのスブグトゥ（勝負事）は、久しく行っていない。また、沖縄の「長者の大主」に相当する「ウブンダー」（西地区）等は町

制 60 周年の際に見ることができたが、現在はほとんど見ることができない。舞台の芸能を見る機会は、かなり減っている。結願祭は行っていないが、豊年祭はある。ただ、組踊や狂言（きんぐい）は全く見ることができない。比川地区には狂言（きんぐい）を見ることができると言う。

その後、「与那国島歴史文化交流資料館」において、小池康仁氏、与那覇有羽氏、田里鳴子氏から聞き取り調査を行った。調査に出向いた 2017 年 11 月 24 日は、折しも町制 70 周年祝賀会に向けて、西、東、島仲、比川の 4 つ地区が出し物の稽古をしていた時期と重なった。

西地区　来夏節　　東地区　チディン口説・亀久畑節
島仲地区　ナガク節・来夏節　　比川地区　うりずん・比川みやらび

各公民館には、シス（師匠）とよばれるものがおり、各地区の伝承者の養成を担当している。しかし、現在は日常的に稽古を行っているのではなく、イベントや祭の前に、号令し、人数集め、数日間の稽古の後に舞台に出るというスタイルが殆どである。このような傾向は、1980 年代に出張公演が多くなった頃の体質を引き継いでいて、上演する目的が、〈神〉から〈人〉に移ったことによることが考えられる。上演目的の変異は、実演家の意識を少なからず変えていくことになる。芸能に関わる労役は、自治公民館が請け負ってくることが多く、イベントへの出演は、男性よりは女性への負担を強いることになる。イベントに芸能を提供することは、そのイベントへの投資なので、最終的には集金（祭では入場券などを売る場合もある）を目的にしているところもあるという。出演者は、当然恥をかいてはいけないので、より厳しく指導されることによって、不平等感を募らせている実態もあるようだ。

このような意識のズレは、シス（師匠）と出演者の世代間格差でもある。現在のシス（師匠）たちは、成熟した与那国の芸能を、活気あふれる感覚とともに記憶しているが、それを習う現代の実演家たちは、少ない人数で、仕事や家庭の事情をやりくりして、半ば強制的に担わされている部分もあるため、義務的な意識を払しょくできないでいる。ましてや、そのような状況に「正統」をかざして指導をされることは、人間関係が冷え込んだり、無理な緊張を強いたりすることになる。ただ一方では、シス（師匠）の教えを、しっかり受け止めたいという気持ちもあり、可能であればしっかり指導を仰ぎたいということもあるようだ。しかし、イベント出演の依頼から、本番までの日数が迫った状態で舞台に立つことも

多く、板挟みになることが日常化している。

町制 70 周年祝賀会に向けた出し物の稽古風景は、地区ごとの実態を捉える意味からも有益だった。特に、移住者の積極的な取り組み方は、目を見張るものがあった。彼らの目的は、人に見せるために稽古に参加するというよりも、地域に溶け込み、地域の輪に入ることを目的にしている。ゆえに、義務感から出演する者たちとは異なる視点で参加していた。

3　自治公民館別人口及び世帯数・役員数（2017年10月現在）

自治公民館名	性別	男女別	合計	世帯数	役員数
東自治公民館	男	199	407	186	6
	女	208			
西自治公民館	男	234	446	229	8
	女	212			
島仲自治公民館	男	86	164	82	5
	女	78			
久部良自治公民館	男	344	574	362	11
	女	230			
比川自治公民館	男	61	115	61	4
	女	54			
合計	男	924	1706	920	34
	女	782			

2016 年 3 月 28 日、防衛省が西部方面情報隊等を与那国島に配備した。そのため、自衛隊員の家族が島に移住するケースが多くなった。4 つの地区の稽古風景を見学した際、自衛隊員の家族の姿もあった。世帯数の少ない比川は、弥勒や狂言（キングイ）をはじめ、独特な演目の残るところだったが、継承は難しい状況にある。しかし、そこは移住者たちが支えており、子ども連れで稽古に励む様子もあった。

4　「与那国島の祭事の芸能」の現在②（2018年2月16日）

2 回目の調査は、主にシス（師匠）たちからの聞き取りを行った。与那覇令子氏（西）、崎原弘子氏（西）、新里恵美子氏（島仲）、前浜盛二美子氏（比川）、前浜郁子氏（東）に集まっていただいた。また、別時間に、地域の関係者 14 名に集まっていただき、様々な意見や感想を聴取できた。

その中で、ある方がチディン口説は、沖縄芝居役者牧秀夫（本名真喜屋実秀）が振り付けたと証言した。牧秀夫は、翁長座に所属し、映画「運玉義留」に運玉義留役で出演した役者である。踊り上手で、浜千鳥、繁盛節、加那ヨーの三曲を、連続早変わりで見せるかくし芸を得意とした踊り上手で名の知れた役者である。沖縄本島北部や八重山などでは、村踊の指導を芝居役者に依頼するということは、よく耳にする。牧秀夫が何故に、与那国島に来島したのか、その経緯は不明である。また、この証言が事実かどうか確かめることは、今のところ難しい。

工工四や舞踊譜なども発刊されるようになった与那国の芸能は、スブグトゥ（勝負事）によって、各地区が新しい芸能を求めて競い合っていたこともあるので、直ちに否定される証言とは言い難い。むしろ、小道具や衣装が独特であることなどは、他からの文化の移入を考えざるを得ないとも言える。舞台芸能として出張公演の依頼の多かった時期は、他の芸能と接触する機会も多く、人に見せる芸能と意識することが多かったと思われる。それゆえ、島外の芸能家から技を教えてもらうこともあったのではないか。

5　民俗芸能研究の課題

初期の民俗芸能研究には、予めその研究に内包しているイデオロギーが強固であった。即ち、「民俗芸能」には、「始原」「古風」「伝統」「素朴」を含む術語として機能していた。これは、民俗学に資する一面を「民俗芸能」に見出し、民俗芸術として価値付けようとすることが優勢だったからである。しかし、現代的な課題である「過疎化」「都市化」「少子高齢化」「環境汚染」「原子力汚染」などを通して民俗芸能を論じることは、可能でないだろうか。

例えば、与那国の芸能は、地域の芸能としての側面と、見せるための舞台芸能としての側面があるが、「過疎化」「少子高齢化」の様態をより具体的な分析に即して物語らせることは可能なのではないだろうか。また、民俗芸能を「動態」としてとらえ、その土地を反映する歴史や思想の変遷を物語らせることを可能にするだろう。

与那国島には、「国境」「防衛」「密航」「密貿易」等、通常得られない術語を見出すことができる。このような語が即民俗芸能研究の術語となるかは、まだ不分明だが、与那国島の現況を考えると、「始原」「古風」「伝統」「素朴」の中に封じ込めるには、無理を感じてしまう。「与那国島の祭事の芸能」の調査を踏まえつつ、

今後の課題として、民俗芸能研究のあり方も考えていきたい。

（参考）
文化庁ホームページ「国指定文化財等データベース」に記載されている「与那国島の祭事の芸能」の「主情報」を以下に転載する。
（https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/302/160）
名称：与那国島の祭事の芸能
ふりがな：よなぐにじまのさいじのげいのう
種別１：民俗芸能
種別２：その他
その他参考となるべき事項：
指定証書番号：1
指定年月日：1985.01.21(昭和 60.01.21)
追加年月日：
指定基準１：
指定基準２：
指定基準３：
所在都道府県：沖縄県
所在地：
保護団体名：与那国民俗芸能保存会　東地区芸能保存会，西地区芸能保存会，島中 (ママ) 地区芸能保存会，比川地区芸能保存会，久部良地区芸能保存会
解説文：与那国島は我が国最西端の地であり、かつて南方文化、中国文化の影響を受けるとともに、西下した琉球王朝時代の文化をも受け止めて八重山諸島の中でも特異な文化を継承してきている。島内には十二の御嶽【うたき】があり、季節の折り目にはそれぞれの祭事があって、この祭事の際にはさまざまの歌や踊りが行われている。これらの歌や踊りにはその古態をいまに留めたものが多く、神器を採って舞うタマハティ（魂貽）をはじめとし、芸能史的にも民俗的にも注目すべき芸態を数多く伝承している。
この地の祭事における芸能には、ウブンダと呼ばれる翁が登場して祝詞【のりと】を述べ、その後、棒踊り、舞踊、狂言、組踊り、獅子舞などを演じるものがあり、みるく（弥勒）が大勢の者を引き連れて登場し、舞踊、狂言、棒踊りなどを演じ

てみせるものもある。その上演は、いずれも数時間を要し、数多くの芸能はすべて古風な趣を伝えていて、芸能史上極めて価値が高い。

※　本稿は、文部科学省および日本学術振興会が交付する科学研究費助成事業により行われた研究の一部である。基盤研究（C）研究課題 / 領域番号（17K02669）研究代表者：狩俣恵一「琉球・沖縄の伝統文化の継承と琉球語学習の基礎的研究」
※　本稿は、平成 30（2019）年度　奄美沖縄民間文芸学会の研究発表に拠る。

（参考文献）

宮良保全『与那国の民謡とくらし』（あけぼの出版）2007 年
与那国町教育委員会編『与那国島の祭事の芸能』1988 年
与那国町教育委員会編『与那国島の無形文化財』1978 年
橋本裕之『民俗芸能研究という神話』（森話社）2006 年